性教育をすすめるとき、すすむとき、そして立ち止まるとき
―ゆたかで多様な実践の可能性―

浅井 春夫
ASAI Haruo
性教協代表幹事、立教大学名誉教授、本誌編集委員

私が新卒の時（もう50年以上！も前のことだが）保健の授業がうまくいかなくて先輩の教師に悩みを打ち明けたことがあった。色々なやりとりの結果、先輩の下宿をテープレコーダー（何とオープンデッキの！）を持って訪ね授業展開を録音させてもらった。そして何度も何度も聴いて、私は自分の授業に臨んだ。

今思えば素朴な文化の伝承であったし、そうやって少しずつ私は自信をつけていったように思う。昔話にはしたくない。

若き日の青年教師から学ぶ

この一文は「学校で性教育をはじめるために　その1」を特集した『季刊セクシュアリティ』84号の編集後記で村瀬幸浩さんが書かれたものです。私はこの数行のことばに心をゆさぶられました。

この若き日の青年教師の姿のなかに、今回の特集テーマに関わるいくつもの実践をはぐくむ手がかりがあると思うのです。一つは自らが一歩を踏み出し、模索し挑戦している実践者としての構え方です。自らがまずは手探りでやってみて、授業のねらいや想定している生徒たちの反応とは違う現実を見つめることを通して、誠実に次に向かう準備をしていることです。

村瀬さんはだいぶ以前ですが、こんなことを話してくれたことがありました。「新任の頃、授業で各クラスを回るのだが、今日のAクラスは○、Bクラスは×、Cクラスは△というように、相撲の星取表のようなものを作って記入をしていた。だんだんと○が多くなっていくことで、この仕事でやっていけるという自信を持てるようになった」と。理路整然と語る村瀬さんが新米教師の頃はそうだったんだと、なんだか励まされた気持ちになったことを覚えています。あの村瀬さんが青年期にこんなゆらぎの中で授業に向かっていたと思うと、何だか勇気が湧きませんか。

もう一つあげておきますと、授業がうまくいかなかったとき、明日はこんな題材と方法で、導入部はこうで……などと“実践のゆらぎ”が創造性の原動力となるという基本です。でもその通りにはいかないので、つぎの日のためにまた考え準備をする…そこで問われているのは“ゆらぐちから”ではなく、“ゆらぐことができるちから”なのです。つまり準備をして誠心誠意の努力をして授業に臨んでも、うまくいかないときに、ほかの方法や実践のあり方を模索する実践の柔軟性や振幅性、創造性が“ゆらぐことができるちから”であって、主体的に自らが研究し変わっていくこと、つぎに挑戦する方法を主体的に選択すること、さらにいくつもの方向と内容を探ることなどが“ゆらぐことができるちから”なのです。そうした実践的研究と研究的実践のあり方が性教育をすすめるときに求められているのです。

さらに「何度も何度も聴いて、私は自分の授業に臨んだ」という中には、単純に真似てなぞるような授業実践をされたのではなく、聴きながら実践の主体者として何を付け加えて、何を捨てるべきか、あらためて授業展開はどうあるべきかという学び方をしたうえで、授業に挑まれたことでしょう。

「そんな時間的な余裕も教師間の関係なども、今の教員にはない！」といわれるかもしれませんね。たしかにそうかもしれません。でも私が本稿で貫いているスタンスは、精神主義だと批判されるかもしれませんが、“決意こそ創造

の母である”という観点から、「私」の決意と本気（本当の気持ち）をどうはぐくむことができるのかを問う内容となっています。読者のみなさんと周りの教員仲間の本当の気持ち＝教師の魂と志を私は信じたいし、「私」はこのエピソード（ある人について、あまり知られていない興味ある話）を「昔話にはしたくない」ということばを胸に刻みたいと思うのです。

教師のことばが届くとき―AIと教師の生の声の違いとは―

文字にすればまったく同じことを語っているのに、それが相手に伝わる場合と伝わらない場合があるのは、それはどこにちがいがあるのでしょうか。端的にいえば、発することばに感情を重ねて送りだしているかどうかです。科学的な知識を豊富にコンピューターに詰め込んでセットすれば、AIの方が確実にことばも正確にしゃべり、資料も説明し、トータルでバランスの取れた内容を予定通りに、授業時間内で話すことのできる有能なスピーカーとなるでしょう。

パソコンで打ち出せば文字的には同じですが、生身の人間のことばの有意性は実践者の側の想いや願い、表情や息づかい、さらに感情を込めてことばとして送り出しているかどうかです。いい実践者の授業には、科学的な内容とともに心と感情のこもったことばが子どもたちに届いて、生徒たちが感性と知性のレベルで受け止めている関係性をみることができます。

では“ことばに心と感情を乗せて語る”とはどういうことをいうのでしょうか。私たちが授業実践で発することばの根底には、発する側が何を伝えたいのかという想いやねがい、希望などが塗りこめられているのが実際です。ではそうしたことばを発する側に必要なちからとは何でしょうか。

その第1は、子どもや地域、社会の現実をどのように感じとり、何を課題として考えているのかが問われているのです。子どもといっても、子ども集団（学年レベルやクラスではずいぶんとちがうこともあります）であることも、また子ども個人や“気になる子”、“やんちゃな子”がいることを意識することもあるでしょう。「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」の特徴として「課題主義」という用語を使って私は説明していますが、何を「課題」として捉えるのかによって、考え方とかかわり方がちがってきます。実践と行動の出発点には、理論や思想の前に、私自身が何を解決しなければならない問題＝課題として考えているのかが問われるのであって、その過程で自らの理論や思想も鍛えられ、学び直しのあり方もちがってくるのではないでしょうか。

第2は、性教育・セクソロジー（人性学）の最新の理論と実践を学び続けていることです。自己教育としての学びは実践を見直し、新たな挑戦のテーマを発見し、専門職に必要な勇気を生み出すことになります。私が児童養護施設で働いていたときに、施設内での子ども間の性的な問題が起きたことから、性教育に関心を持ちはじめた時期に、関連する文献はけっして多くはありませんでした。日本性教育協会の『現代性教育研究月報』（1983年7月～2011年3月までのマンスリーレポート）を遡って読み漁り、翻訳本の古典などを買うために古本屋回りなどもよくしたものです。山本直英さんや村瀬幸浩さんが次々と出版される書籍が出るとすぐに買い、読み漁る毎日でした。それは砂地に水が吸い込まれていくようにという表現がぴったりする学びの日々でもありました。

第3として、議論をする場の大切さを上げておきます。学校現場での実践の総括や方針論議、様々な研究会での議論も重要ですが、ここでは“人間と性”教育研究協議会（略称：性教協）での私の学びにふれておきます。性教協の例会やセミナー、理論と実践講座などは本当に“目からウロコ”状態の連続でした。それは知的ショックとでもいうべき感覚でした。当時、児童養護施設では離婚について“家庭崩壊”という用語とイクォールで語っていても何も躊躇はなかったのですが、その点に関しても研究例会で高柳美知子さんと激論を交わした記憶があります。その指摘を受け止めることに時間は必要ありませんでした。家族に関する捉え方についても父母と子ども（場合によっては祖父母）がいる伝統的な家族形態こそ“正常”で“フツー”のあるべき姿と思い込んでいたのですが、議論と指摘を受けるなかで私の家族観を根本から変えることになりました。そうした連続が性教育の学びのプロセスでもあったのです。そうした過程を一言でいえば、性教育の学びはまさに自己変革の歩みであったといえます。“自己変革を恐れるものに発達なし！”です。多くの場合、性の学びは男性にとっ

ては自己解体の要素を多く含んでおり、女性にとっては自己解放という側面を持っています。男性の自己解体の後には自己解放がつながるように接続していくことは、性教育の現代的課題の一つでもあります。

もう一つだけあげておきますと、性教育は出会いがとても大事です。古川聖子さん（公立小学校教諭）は「運命的な出会い」（本誌84号、55頁）を語られています。出会いのチャンスを活かすかどうか、それはいわば運のレベルもありますが（いい仲間や管理職に恵まれるなど）、いくつもの出会いを活かすかかどうかは「私」の勇気と努力であると強調しておきます。組織的な発展も個人の決意・勇気から第一歩がはじまるのです。そして誤解を恐れずにいえば、組織は上からつくられるのです。一人の勇気ある呼びかけと行動なしには連携も連帯もつくられていくわけではないのです。上からつくられることはプロセスの問題であって、平等で民主的な関係性と対立する概念ではないことを申し添えておきます。

ゆたかで多様な実践の可能性

ゆたかで多様な実践の可能性についてふれますと、第1に“これならできる”という現実的な判断もありますし、それを否定はしませんが、あえていえば“このテーマと課題について語る必要がある”“語ってみたい”という出発点と立ち位置を大事にしたいと思っています。率直にいえば、問題意識をしっかり持った実践こそが発展のエネルギーを蓄えているのが実際です。同時にできるところでやってみて、新たな課題を発見し次の実践へと繋がっていくいう道筋があることも実際です。一番やりづらい学年・クラス・グループであっても、子どもたちが求めている根源的な学びの要求に挑戦する意志を持ち続けるかどうかが教師としての専門的勇気でもあるのです。その点で“やれる実践”と“やりたい実践”の狭間のなかで、何をどう計画を立てていくのかも実践者に問われる課題です。その組み合わせを考えながら、大事なことはいま私がやりたい実践、やるべき実践とは何かを問い続けることが必要なことです。性教育実践者における「発達の最近接領域」（他者の援助・協力関係において「あることができる（＝わかる）」という行為の水準ないしは領域のことである。別の表現をすれば、現在の発達水準と、他者からの援助や協同により実現可能となる、次のより高度な発達・実践水準のずれの範囲のこと）を広げていくことが豊かで多様な実践には必要なことなのです。

第2に、ゆたかで多様な実践をすすめるためには「発想の転換」が必要です。発想とは「新しい考えや思いつきを得ること。また、その方法や内容」のことをいいます。学ぶことで実践はよりゆたかになり、具体化していく可能性が広がります。学ぶことの中身には、本を読むことで性教育に必要な知識（哲学・人権論から社会学、身体学、発達論、人間関係論、法律など）を獲得すること、研究会などに参加すること、ほかの先生の授業実践を参観することなど、広くて多様な学びが求められます。あえて強調したいことは、学ぶことの基本は本を読むことです。それは問題意識を失わないうえでも必要な努力です。“学ばぬものに発達なし！”といわなければなりません。

性教育づくりの転換は、①観点・学びの転換、②実践と関係づくりの転換、③仲間づくり・ネットワークづくりの転換によって具体化され、性教育実践をゆたかに花開かせる可能性が広がります。

①観点・学びの転換は、性教育が子どもの性行動を誘発するなどの論理などは論外にしても、その目的が生徒（集団）に問題行動を起こさせない手段としての性教育観から、科学・人権・自立・共生の性教育の理念を自らの実践の観点として獲得することがあげられます。そのためには自らの自己変革をともなう学びのあり方が問われるのです。性教育観の転換が実践を創り、そのプロセスのなかで性教育の見直しとバージョンアップの可能性が広がるのです。

②実践と関係づくりの転換は、①の転換と重なりながら、たとえば、一方的な語りの授業から対話型の授業実践に、さらに子どもの現実と課題を踏まえた授業計画の作成、「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」を活かした

子どもの課題の発見などによって実践内容と方法を発展させることがあげられます。

③仲間づくり・ネットワークづくりの転換は、性教育を発展させていくうえで、必要な条件整備となります。個人が切り拓く実践から学校内での組織的なとりくみへ、さらに地域の専門職・専門団体との社会的連携のなかでゆたかで多様な実践の可能性を広げることにつながります。性教育は学校の体質を問いながら、子どもの現実から出発する教育実践に立ち返る視点を提起するとりくみともなります。

性教育はその中身の変革とともに性教育を通して学校変革と子どもとの関係をつくり直すきっかけともなります。それは教員の子ども観と教育観を変革する営みでもあるからです。その点で性教育の理論と実践は可能性に満ちたとりくみといえます。

授業実践の生命線とは何か―実践のプロセス―

では授業実践の生命線とは何かを整理しておきます。

第1は、学習目標の設定の確かさです。その確かさは授業計画の作成者・授業者が子ども（集団）のリアリティをどう捉えているのか、子どもと地域の現状に対する問題意識に関わっています。

第2に、実践者が何を問題・課題発見として取りあげるのかが授業実践の生命線といえます。それは子どもや家族が背負っている問題の社会的背景や構造をいかに捉えているのかが問われることになります。

第3に、授業実践では授業の運び、学びのプロセスのあり方が問われます。実践者の働きかけと生徒たちの応答が具体的にどのように生き生きと繰り広げられたのか、教師と生徒のやり取りのなかで、お互いのなかに何が醸成されたのかが重要なことです。授業実践では何を教えるか、生徒が何を学ぶかが重要ですが、性教育実践を創る観点では、固定的な価値観からゆたかで多様な行動の選択肢があることを知り、そのなかで何を選択するのかという判断の基本的観点を学ぶことではないかと考えています。

第4として、授業テーマの位置づけ、何のためにこのテーマを取り上げるのかが明確にされ、子どもの知識・価値観・スキル・行動・態度の変容にどう働きかけているのかが問われます。子どもと社会の未来を語るという視点で授業テーマに挑むことが求められます。

第5に、学習方法としてどのような方法を選択するのかも授業実践では問われます。それは第1から第4までの内容と深く関係していることはいうまでもありません。

第6として、資料・情報の収集とアクセスのあり方も重要な課題です。

第7に、授業実践の評価をいかに行うことができるのかを検討していくことは重要な課題です。感想用紙から読みとることとともに子ども自身が学びの自己評価をどう行っていくのかに照準をあわせて検討したいものです。

第8として、現場における研究は、未来の実践をどのように創っていくのかをめざして具体化するものです。むしろこれからの課題を示そうとしない授業実践は、肝心のところが抜けているといわざるを得ません。

授業実践には創造力と想像力が求められます。実践そのものと同時に授業計画にも自らが何を大切にし、何をめざすのかが問われます。“大事なことは自らの実践と子どもたちの現実を読みとる想像力と何を創りだそうとするかという創造力が問われます。

想像力は、私たちの実践に意味を持たせ、知識をつなぎ合わせるシナプスの役割を担っており、授業実践を創造する基本的な能力です。想像力は、実践や子どもの生活プロセスをわかるうえでも、また実践という物語を紡いでいく際にも問われており、それは授業報告の読み手においても求められるちからであるといえます。

書くことで拓く可能性

もう一つ、ゆたかで多様な実践の可能性を拓く取り組みとして、書くことの

意義についてふれておきます。自らの実践の記録を通して実践を分析・客観化すること、また授業計画を作成することで創造的発展をイメージし、何を大事にした実践をすすめるのかを確認できることがあります。授業実践を記録することで大切なことを二つあげておきます。一つは「なぜ、何のために実践報告を書くのか」ということです。もう一つは、授業実践の記録、授業計画にはこれを貫く目的が通っていなければなりません。書こうとする意欲・信念を持続させるためには、子どもや社会の現実への怒りや貧しさ、マイノリティの人々への共感などが必要です。

実践報告を書く目的によって、記録する対象の設定から書き方をも規定することになります。書きたいというほとばしる動機、目的、ときには“失敗”事例に対する悔いであったりすることもあるでしょう。“弱い立場におかれた人々への共感を貫く”という書く側の姿勢の大切さがあります。この点を忘れた実践の記録には“わかること”とともに“感じること”が乏しいことも少なくありません。困難な暮らしを強いられている子どもや課題を背負っている子どもへの共感も努力して獲得する感性であることを強調しておきます。

授業実践の記録を書くということは、目標（とりあえずの目標や確固とした長期的目標までいろいろある）をもった実践を踏まえた分析・総括・反省を通して再実践という循環の営みです。そうした取り組みは、すでに時間的には経過をした実践の再構成という側面をも内包しています。さらにときには仮説実験的な取り組みを構想するまとめともなり得るし、それが再実践の土台になっていく可能性があるのではないでしょうか。

【雑文閑あり……ここまで読んでいただき感謝！　ちょっと私の作詞で休憩を】

文字にするちから　語るちから　心するちから

人間にはいろいろなちからがある。

苦しいこと、辛いことをことばにはできないけれど、文字にすることはできる。

うれしいこと、感激したことを思いっきりことばで表わしにくいことがあるけれど、文字にはできることがある。

文字だからこそ語ることができることがある。

語ろうと思うと、その瞬間、語りにくくなることがある。

それでも口にすることで、心が伝わることがある。

語ることは、相手が語ることを待つことでもある。

語ることで相手と心を通わせることができることもある。

人間は必死で文字にすることが必要なときがある。

自分の存在をかけて語るときがある。

そして心を失わずに、心するちからが試されるときがある。

心を失わずに生きることがたたかいであるときがある。

そうした人間である自分を信じたい。

（NHKテレビ1「明日へ」で「福島百年後にあてた子どもの手紙」を観ながら　2014年9月21日）

そして立ち止まるとき

今仁美哲朗さん（本誌84号「新人教員がベテラン教員に聞く」で登場する公立小学校教諭）は、性教育を「授業として始めたのは次の学校に行ってから。初任８年目からですよ。……自分でやり始めようっていうことで、もうゲリラ的にです。ゲリラ的というのは、他から見れば、相談もなく1人で突然やりだしたということです」（本誌84号、18頁）と語っています。ここには教員個人としての発達のダイナミズムがあるのではないかと思うのです。ペンネームは今仁美哲朗（いまにみてろう）で、この教師としての執念が本人の性教育実践を花開かせたのであり、自治体における集団的な研究活動の組織化をすすめることができたのだと思うのです。ではこの「執念」とはいったい何なのでしょうか。子どもや家族、地域の現実を見つめるなかで、教師として避けてはなら

ない実践として性教育が位置づいてきたのであり、「ゲリラ的」に実践を踏み出したのではないでしょうか。

軍事用語（ゲリラ的、正規軍的などの用語）を避けて説明すれば、性教育の実践・運営方法もまた個人ができるところから踏み出す実践と集団的組織的に学校ぐるみ・地域ぐるみですすめる協同の取り組みの2つの方法があります。どちらを先行させるのかは学校や地域の状況によって変わってきます。すでに「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」が世界の共有財産となるなかで、性の学びと多様な性の視点の共有化は子どもの権利保障と国・自治体・教育行政の責務としてあることが確認されています。個人の「ゲリラ的」実践という勇気を大切にするとともに、教師・学校職員集団の連携的とりくみと地域の専門職の協同をつくりながら、一人ひとりの教育の創造的実践を花開かせることが求められているのです。

学校環境が性教育のしやすい万全の体制であったことは、わが国の歴史では１度たりともありません。学校環境が整ってからといった考えでは結局は実践への着手は永遠に未来の課題となってしまいます。大事なことはいま、目の前にいる性の学びを必要としているすべての子どもたちに性教育を実践していくことなのです。わが国においても、世界の多くの国々においても性教育は偏見と攻撃にさらされながらも実践を切り拓いてきた歴史とそのなかで鍛えられた実践者のレベルの高さがあります。

いつもいつも前に走り続けることができるわけではありません。気持ちが萎えて、立ち止まり、後退することもあります。だって人間に向かい合う教師なんですから！「一歩前進、二歩後退」の精神でいきましょう。二歩後退しても、歩みを止めたそのあとの一歩が二歩以上の大きな一歩であれば、立ち止まった時間の意味があります。一回り大きな教師として、子どもたちの前に立つことができればよいのではありませんか。

性教育をすすめる自分づくりのために

性教育は自己変革とのたたかいが求められます。自己変革には決意と本気が必要です。でもそんなに簡単に自分づくりができるわけではありません。ゆっくりと、ときには急いで「性教育をすすめる自分づくり」をするためのポイントをまとめとして書いておきます。

① いま子どもたちに語ってみたいことを心に描くこと

「これならできる」実践も、「これをやりたい」と願う実践も、何を子どもたちに語ってみたい、伝えたいと思うのが重要なポイントです。それは子ども（集団）の課題をどのように捉えているのかが問われる内容です。子どもたちの現実、子どもの疑問や質問、つぶやき、子どもとの対話などから子どもたちに語ってみたい、語らずにはいられない課題やテーマを描いてみることが出発点になります。教育の営みには、山登りと同じように頂上（目標）を設定することから具体的な歩み（方法と内容）がはじまるのです。

② ちょっと背伸びして目標にすべき実践も視野に

水野哲夫本誌副編集長は、本号の編集会議で特集テーマに関わって実践例を整理したなかで、手の届きそうな実践づくりを目標にしてみる必要性をあげています。実践と研究のチャレンジが専門職の発達には必要なことです。実践における「発達の最近接領域」を視野において学びながら、目標をもって実践を構想していくことが重要なポイントです。

③ 語りあえる仲間をつくること

個人で努力を続けていくことはしんどいものです。最近、「ガイダンス」の学習会でお伺いしたあるサークルでは、長い期間、“一人サークル状態”だったけれど、お一人が加わって話し合いができるようになり、人脈も一気に広がり、会員やレポーターもふえて活気がでてきたといわれていました。そういわれた教師の顔が輝いていました。

性教育のすべてのテーマや授業内容でなくても、性の学びのどこかに関心がある仲間は学校内にも必ずいるはずです。要は、職場の仲間をみる私の人間観

が試されていると考えたほうがいいのではないでしょうか。

まだ性教協に入会されていない方がおられましたら、ぜひサークルでの例会、全国夏期セミナーなどで、ともに学ばれることを心から呼びかけたいと思います。

④教職員の性教育へのスタンスはいわゆる「反対」「支持」というだけでなく実に多様です

人間とくに専門職は自らの活動領域と立ち位置によって人権感覚が見えやすかったり、制限的であったりすることも少なくありません。周りにいる教員は自らの性教育観を明確に表明するかどうかは別にして、「反対」「支持」とはっきりと二分されるのではなく、流動的な「中間」層といえる圧倒的多くの教職員がいるのが実際です。「反対」派などとレッテルを貼ることなく、まだ声かけをされないで性教育の中身と真実を知らないままでいるだけなのではないでしょうか。私たちがそうであったように、性の学びのチャンスがあれば“目からウロコ”ともいえる知的な地殻変動を起こすことが少なくありません。そうであればすべての教職員に情報発信と提供を行い、どのような具体的な働きかけをすることが必要なのかを考え続けたいものです。

⑤自らの本棚に性教育と関連分野の書籍を増やすことが本気度の目安です

現在は多くの書籍が出版されていて、研究環境は私が性教育を学びはじめた頃と比べると雲泥の差があります。近刊で田代美江子さんが編著者の一人である『教科書にみる世界の性教育』（かもがわ出版、2018年2月刊）は、まさにコンパクトに9ヵ国の性教育政策と実践内容を学ぶことができる本です。性教育実践者にとって学びの環境は、その気になればいわば学び放題という状況にあります。本は買ってすぐに読めなくても“積読（つんどく）”ということでも意味はあります。あえていえば背表紙を見ていることで自らの問題意識を手放さないことも重要な意味があります。性教育をすすめる自分づくりには、独習は必要不可欠な取り組みであり、実践に歩みだす出発点であり、骨格と血肉となるものです。

⑥授業実践の内容を、生活指導などのほかの教育実践の内容や自らの暮らしの現実との矛盾に気づくことも学びの当事者として自己変革をすすめていく課題です

問題はそうした矛盾に気づこうとするかどうかであり、その矛盾に誠実に向かいあおうとしているのかが性教育実践者に問われているのです。中島みゆきの歌になぞらえていえば、「皆、人生は素人につき」模索のなかを生きているのです。その際に何を大切にして生きるのかを考える心の軸を形づくっていくことが性教育のひとつの役割でもあります。

性教育を切り拓いてきた先輩たちを想うことがあります。性教協の結成以前のことですが、北海道では性教育の研究会に対して“すけべサークル”と教師仲間から揶揄されながら研究をつづけた先輩たちがいます。「ここから裁判」を闘いぬいた仲間がいます。3月16日性教育に対するバッシング質問が「ここから裁判」の被告でその行為が違法とされた都議によって再び行われました（「朝日新聞」3月24日付朝刊）。教師・専門職の名にかけて、「不当な支配」に対して頭をあげて抗いたいものです。「ふたたび許さない！」の決意をもって。

お互いがそれぞれの足で現場に立ち、だれのために、何をするのかを性教育をすすめる自分づくりのために考え続けていきましょう。この時代の分岐点のなかでまっとうな人間的な怒りを持ち続け、希望を抱き続けていきたいものです。

浅井 春夫（あさい・はるお）
一般社団法人“人間と性”教育研究協議会代表幹事、『季刊セクシュアリティ』編集委員、全国保育団体連絡会副会長、日本思春期学会理事、「戦争孤児たちの戦後史研究会」代表運営委員。立教大学名誉教授。専門分野は児童福祉論、セクソロジー。著書として『「子どもの貧困」解決への道』（自治体研究社、2017）、『施設養護か里親制度かの対立軸を超えて』（共編著、明石書店、2018）、近刊予定として『幼児期の性教育』（仮題、エイデル研究所）など。